ボールバスターズ・クラブ　弐

「うう……」
男が呻いた。
「気がついた？」
声をかけられ、男は眼を開けた。しばらくぼんやりと首を振ったり、瞼をパチパチさせていたが、やがて、「あっ！」と叫んだ。
目の前に、三人の有名人――女優の涼子、美紀、晴美が座っているのだ。
「玉を蹴られた感想はどう？」
美紀が言った。
「全部、見せてもらったよ」
晴美が、デジカメを振ってみせた。男は愕然とした。やっと事態がのみこめたようだった。慌てて、デジカメに飛びつこうとした。
だが、不可能だった。男は全裸で、天井から両手を万歳した形で吊るされていた。両脚は大きく広げられ、床に固定されている。
男は恐怖におののいて、周囲を見回した。カーテンを締め切ったなかで、電気スタンドだけが薄暗く点いていた。家具は椅子が三脚のみ、フローリングの床に置かれており、三人の女たちが

座っている。
「せっかく駐車場まで潜入できたんだから、内部で何が行われているか、教えてあげようと思ってね」
晴美が立ち上がって男に近寄り、指で頬をつつき、それから腹部を股間に向けて撫でおろした。男は、恐怖に眼を見開き、晴美の指の行方を追っていたが、いきなりペニスをぎゅっと握りしめられ、ひっと喉の奥で小さな悲鳴をあげた。晴美は、そのままペニスをやわらかく扱きはじめた。
「うそ……勃起してる」
晴美はくすくす笑った。涼子と美紀も好奇心を剥き出しにして、男の股間を覗き込んだ。
「ほ〜んとだ」
「怖くないのかな」
「ねね……」
涼子が言った。
「今日、潰した男は、蹴れば蹴るほど、勃起してたのよ」
「ああ、たまにいるよね、そういう男」
「潰れる瞬間に射精する男はよくいるみたいだけど、こいつはどうなのかな」
「そりゃ……」
晴美が笑った。

「試してみるしかないじゃん」
言うなり、ペニスを握ったまま、股間に膝蹴りを浴びせた。男は呻き、体を折り曲げて咳き込んだ。
晴美の手のなかで、ペニスが急速に収縮した。すっぽりと、彼女の掌のなかに収まってしまった。
「あ、縮んだ」
「面白いじゃない。私もやらせて」
涼子は晴美と交代し、男のペニスを握り、やわやわとほぐすようにして刺激を与えた。男のペニスがまたも膨張した。
「えい！」
涼子は声をあげて、男の睾丸に膝蹴りを浴びせた。膝小僧で二つの柔らかい玉が変形し、ぐるりと動くのが感じられた。同時に、彼女の掌でどくどくと息づいていた固いペニスが、水の抜けたスポンジのように小さくなった。
「あはははは。これ面白い」
涼子は大笑いした。男は、体を二つに折り曲げ、苦しそうに痙攣している。今にも嘔吐しそうな顔つきだ。
「ねえねえ、晴美。あんた何時もこんなことやって遊んでるの？」

「うん。蹴ってやると、それまで小さくなってたのが大きく膨らんだりすることもあるの。一人一人違ってて面白いよ」
「美紀、あんたもやる？」
後方で椅子に座り、煙草を吹かしていた美紀が首を振った。
「そんな汚いもの、触りたくない」
「さっすが、二十七歳の処女だね」
「よしてよ、収録も終わったドラマのことは」
美紀は不機嫌そうに立ち上がった。
「私がやるのは、ほんとうに潰すときよ」
男が「ひっ」と悲鳴をあげた。駐車場で一蹴りで失神させられただけに、美紀のキックの威力はいちばんよく知っている。
「潰しちゃったら元も子もないよね。そろそろ本題に入ろうか」
晴美はそう言い、男に近寄って、その顎をつまんで顔をあげさせた。
「さて、正直に言ってもらおうか。あんた、何者？」
「……」
男は顔を背けた。晴美は、男に平手打ちを浴びせた。男がまた「ひっ」と悲鳴をあげた。晴美は、つづけざまに脚を撥ね上げ、爪先をぶらさがった陰嚢に打ち込んだ。

「ぎゃあああああああ！！！」
男は悲鳴をあげ、身を捩って身悶えた。
「スタッフでもないかぎり、あの駐車場には入れないはずなんだよね」
「……ぼ、ぼくは……ただ、頼まれて……」
「頼まれて？」
涼子は身を乗り出した。
「誰によ？」
「知りません……。チャットで知り合ったんです……撮影に成功したら五十万円くれるって……」
「チャットで？」
「そうです……。で、入口とか教わって……撮影に成功したら、写真をメールで送れって……。それと引き換えに五十万円振り込むと……」
「じゃ、そいつとは会ったこともないってわけ？」
「はい……」
「なにそれ？」
涼子は呆れて肩を竦めた。
「……いや、別にお金に困ってはなかったし……、それに芸能人がたくさん来るって言われて……ちょっと興味あったもんで……」

「じゃ、あんたまさか、あそこが何をするところかも知らなかったわけ？」
「はい……いま、知りましたけど」
男はうなだれた。三人は顔を見合わせた。
「どうする？」
「どうするも何も、こいつの依頼主を突き止めないことにはどうしようもないよね」
「ちょっと危険かもしれないけど、やってみるかな……」
美紀が腕組みして呟いた。
「え、なにを？」
美紀は視線を男に向けた。
「その前に、こいつには眠っててもらわなきゃ」
言うなり、美紀は助走をつけて男に飛び掛かり、「ハイヤアァァァッッッ！」と奇声をあげて、見事なジャンプキックを股間に浴びせた。美紀の左の爪先が男の右の睾丸にのめりこみ、つづいて、右の爪先が左の睾丸を襲った。
男はのけぞり、電気を浴びたように数秒ほど硬直し、それからがっくりと頭を垂れた。垂れた瞬間、血反吐をはいた。
「ちょ、ちょっと」
晴美が慌てた。

「まさか、死んじゃいないでしょうね」
「そう簡単には死なないよ」
美紀は涼しい顔で、男の睾丸を爪先で軽く弾いた。男はビクリと痙攣した。
「あ～あ」
涼子が床にこぼれた男の血反吐を見つめ、キッチンへと足を向けた。
「どうでもいいけど、ここは私の家なんだからね。あんまし汚さないでよ」

男が目を覚ますと、彼は床に転がされていた。両手は背中で縛られているが、足は自由に動く。ただ、股間を中心とした下腹部の激しい痛み、嘔吐と頭痛のため、身を捩ることすらできそうにない。
「さ、でかけるよ」
声がした。三人の女たちが、彼を見下ろしていった。
「でかけるって……どこへ？」
「あんたの家」
男はわずかに体を起こし、目をぱちぱちさせた。晴美が言った。
「村野弘一。三十三歳。杉並区中荻窪七丁目三番地六号柴田マンション二百七十六号室。免許証で調べさせてもらったよ」

「……」
「心配しない。あんたの家のパソコンから、その依頼主とやらにメールしてもらえばいいの。私たちが言うとおりの文面でね」
「そ、それだけやれば……許してもらえますか」
「さあ。それはあんたの態度しだい。少なくとも、言うことを聞かないと、ここでこの怖いお姉さんに玉を蹴り潰されて、明日の朝は東京湾に浮かんでるってことになるかもしれないよ」
美紀が軽く脚を振ってみせた。男は弾けたように上半身を起こしてわめいた。
「分かりました。やります。なんでも言うこと聞きます」
「いい子ね」
三人の女は、男を立たせた。男は顔をしかめながら、なんとか立ち上がった。そのとたん、後頭部に手刀を浴び、再び失神した。
「まったく、慣れてるよね」
晴美が美紀に言った。美紀は、右手の小指の下側をさすりながら答えた。
「いつも、あのクラブで実戦訓練してるもの」

念のために男に目隠しをして車に運び入れ、杉並まで急行した。
柴田マンションは、築二十年はすぎたような、ふるびた建物だった。人目につかないように二

百七十六号室に入ったとたん、女たちは鼻を手で覆った。
「なに、この匂い」
ワンルームマンションのそこここに、カップラーメンの残骸や、ポルノビデオのパッケージ、ティッシュペーパーが散らかっていた。それらの汚物を乗り越えた奥に、デスクがあり、テレビとビデオデッキ、ノートパソコンが置いてある他は、女性タレントのフィギュアが数体並べられている。
「あ、あれ、例の姉妹のやつじゃん」
豊満な乳房を露にしたフィギュアを見て、晴美が言った。
「発売直後だというのに……もう入手してるとはマニアだねえ」
「こら、起きろ」
美紀が乱暴に村野弘一を揺すぶった。弘一はうっすらと目を開けた。美紀は、男の頬に平手打ちを食わせた。弘一ははっとしたように立ち上がろうとし、股間に激痛が走ったらしく、両手でそこを抑えて、しゃがみこんだ。
「とにかく、窓開けるね」
涼子は鼻をつまみ、足が汚れないように爪先立ちで汚物を避けながら、なんとか壁までたどり着き、窓を開けて空気を入れ換えた。
それから、玄関まで戻ろうとして、床を埋め尽くしたゴミの山を見て、苛だった声を張り上げ

た。
「ちょっと！　少しは掃除しなさいよ。歩けないじゃない！」
「すいません」
弘一は頭を下げた。
「すいませんじゃない！　すぐ掃除して！　早くしないと、もっかい金玉蹴るぞ！」
「は、はい！」
弘一はよろよろと台所に行き、ゴミの山のなかから黒いビニール袋を引っ張りだして、片っ端からゴミを詰め込みはじめた。
「十分で終わらせて」
美紀は腕時計を見ながら言った。

やっと掃除が終わり、三人が座れるくらいのスペースができた。
「で、どうすればいいんですか？」
弘一は、怯えたように訊ねた。
「パソコンを立ち上げて、その依頼主へのメールの準備をして」
「はい」
弘一はデスクに座り、ノートパソコンの電源を入れた。デスクトップは、十五歳の水着アイド

ルのウォールペーパーだった。
「こいつ、ロリコンの上に、おっぱい星人かよ」
晴美が呟いた。涼子がくすくす笑った。
「十年前は、あんたをおかずにしてたんじゃない？」
「ふん」
「晴美さんのもありますよ」
弘一が振り向き、汚い歯を見せ、マウスをクリックした。赤い水着を着た十七歳のときの晴美の写真が広がった。
「あ！」
晴美が眼をひん剥いて叫んだ。
「やっぱり」
涼子と美紀がくすくす笑った。
「あと、お二方のお宝画像もあります」
「やめろ！」
涼子と美紀が声を揃えて怒鳴った。
「調子のるな、この馬鹿」
晴美が手をのばし、弘一の睾丸をひねりあげた。

「ぎゃーーーーーー！！」
弘一は一瞬、のけぞって痙攣し、それから両手で股間を抑え、デスクに突っ伏した。
「遊んでるんじゃねえんだぞ！　こんな写真、早くしまえ」
は、はい……と弘一は涙を滝のように流し、鼻を鳴らしながら画像を閉じ、メールボックスのアドレスブックを開いた。
「文面はこう」
美紀が言った。
「例の写真撮影に成功した。今日午前三時、以下の場所に来い。そこで報酬と引き換えに写真のファイルを渡す。来なかった場合には、写真はすべて抹消する」
「は、はい」
「馬鹿」
美紀が弘一の頭を小突いた。
「言ったとおり書いてどうすんのよ！　あんたが何時も、そいつにメールしてるような文章に直すの！」
「は、はひ……」
弘一は慌てて、キーボードに指を走らせた。
「で、場所なんですけど、どこですか？」（つづく）